

# Newsletter

No. 8 March 2013

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

## 旧交を温める

チリをはじめ中南米各国では、JICAの支援により日本で研修を受けた医師や、チリにて開催されていた日本人医師による講習会に参加した医師が多く、彼らは現在もそれぞれの母国で日本から学んだ知識、技術を活かし消化器疾患の診断、治療に活躍しています。



私が大学を卒業し本学第一病理学教室(現・人体病理学分野)の大学院生となった15年前は、毎年夏から秋にかけて中南米の医師に対する病理診断講習会が本学で開催されていました。コースリーダーの中村恭一教授(当時)のもと、全国から消化管疾患の診断・治療のエキスパートたちが講師として招かれており、世界最先端の知識・技術を学ぶことのできる講習会でした。若手医局員であった私は、講師の先生方のスライド係や、懇親会委員、また研修生のお世話などを仰せつかっておりました。自分とほぼ同世代の研修生が多く、講習会が終わった後や週末には、観光地を案内したり、和食レストランに連れて行ったり、私の母に頼んで自宅で手料理を振る舞ったりもしました。講習会は2006年に終了し過去のものとなりましたが、何の因果か南米に赴任することになった現在、当時の研修生と再会する機会に恵まれるようになりました。先日訪れたエクアドル・キトでは、15年ぶりの再会が実現しました(写真)。また私が医師になる前に日本で研修を受けた医師達にも出会いました。彼らは日本で学んだ知識、技術がいかに素晴らしかったかを語り、日本で出会った友人達のことを懐かしそうに話してくれました。日本で学んだことを母国で真摯に実践し、また後進に広めている現在の彼らを見て、かつての講習会は今も生き続けているのだと感激しました。国際協力の理想的な姿を見たように思います。

ニュースレター第8号では、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また前号に引き続き医学科4年次プロジェクト Semester 学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野

**LACRC** TMDU IN CHILE  
Latin American Collaborative Research Center  
Santiago de Chile



## Contents

ご挨拶 .....	1
PRENEC最新情報 .....	2
TMDUと私 .....	4
活動報告 .....	5
プロジェクト Semester .....	6

# PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点(Latin America Collaborative Research Center,以下LACRC)のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象に免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を実施することになっており、3月末時点では全拠点で、約5,400が登録、約2,500名がiFOBTを終了しています。PRENECは、中南米諸国にも広がっており、現在エクアドル、パラグアイにてプロジェクト実施における取り組みが始まっています。本号ではエクアドルでのプロジェクトをご紹介します。

## エクアドルにおけるPRENEC

エクアドルにおいて、大腸癌による死亡率が上昇傾向にあることを背景に、エクアドル政府の要請を受け、本学は2012年8月に、「エクアドル国保健省・東京医科歯科大学間の大腸癌スクリーニングの実施のための覚書」を締結いたしました。現在、首都キトにあるパブロ・アルトゥーロ・スアレス国立病院(以下、スアレス国立病院)において、大腸癌早期検診のパイロットプロジェクトがスタートしています。スアレス国立病院病院は、エクアドル保健省直轄病院の一つで、プロジェクトはエクアドル保健省の支援の下進められており、本学はこのプロジェクトをサポートしています。このプロジェクトは、同病院の病理医であるモンタルボ医師を中心に行われ、CEOであるグアマンティカ医師によって全面的に支援されています。

パイロットプロジェクトは、免疫学的便潜血反応検査にて行い、チリと同様、栄研化学のOCセンサーおよび便潜血キットを用いています。検査方法や陽性陰性のcut off値も、チリにおけるプロジェクトと統一されており、チリのプロジェクトリーダーであるロペス医師のアドバイスを受けながら、進められています。

同病院の内視鏡施設においては、FUJIFILM製の南米における最新機種が2ブース分用意されているほか、十分な広さの検査室とリカバリー室を持った内視鏡室が設置されています。また病理診断については、日本の診断基準を導入したいという強い希望のもと、LACRC が提供した病理診断フォーマット(日本の診断方式に基づいたもの)を用いてデータベース登録しており、病理標本作成プロセスには、過去にJICAから援助された機材が有効に活用されるとともに、本プロジェクトに関する予算によって新たな機材も導入され、その環境は十分整備されています。

検診者に対しては、検査室前の待合スペースに設置されたテレビモニターにて、大腸癌や検査方法を含めたプロジェクトの解説ビデオを流すことで検診者への十分な説明・教育をおこなっています。

現地の内視鏡医・病理医・技師は、本プロジェクトに対しては大変前向きであり、またエクアドル保健省の支援体制も充実している様子が伺われます。



FUJIFILM製の内視鏡機器が設置されている内視鏡室の様子



プロジェクト用に新規購入された病理機材

## 第一回エクアドル日本・大腸病変講習会が開催

エクアドルにおける大腸癌検診プロジェクトリーダーであるモンタルボ医師からの要請で、内視鏡技術および病理診断技術の指導を目的として、スアレス国立病院にて、第一回エクアドル日本・大腸病変講習会(Primer curso ecuatoriano-japonés de lesiones colorectales)が本年2月4日から7日までの4日間に渡り開催され、LACRCより河内講師(病理分野)、田中助教(内視鏡分野)が講師として参加しました。

内視鏡分野においては、大腸内視鏡前処置の意義と方法、大腸内視鏡挿入テクニック、微小大腸病変の拾い上げ方法、内視鏡診断方法について講義を行ったほか、田中助教によるパイロットプロジェクトの患者に対する内視鏡検査を行うデモンストレーションを実施しました。

また病理診断分野においては、日本の大腸癌取扱い規約の紹介、日本の診断基準の解説、早期大腸癌の治療方針にする最新の知見、大腸病変の診断に必要な免疫組織化学・分子生物学的知識の解説が行われました。



講習会の参加者と記念撮影



病理診断部門の講習会の様子



修了証を手にする講習会の参加者



在エクアドル日本大使館を訪問